



勘違いの工房主

Kanchigai no
ATELIER MEISTER

英雄パーティの元雑用係が、
実は戦闘以外がSSSランクだった
というよくある話

アトリエマイスター

6

時野洋輔

Tokino Yousuke

ILLUSTRATION

ゾウノセ

登場人物紹介

バンダナ

神出鬼没で意味深なアドバイスを残す、クルトのかつての仲間。

マーレフィス

クルトのかつての仲間。現在は宮廷魔術師ミコの下で働かされている。

ヒルデガルド

クルトの幼馴染。こう見えて1200年生きており、「老帝」の二つ名を持つ魔王。

ヴィトゥキント・アークママ

転移石をはじめとした様々な魔道具を生み出した功績で、七カ国に工房を持つ工房主。

ユーリシア

クルトの工房に所属する元王家直属冒険者。冒険者として高い実力を持つ。

クルト・ロックハンス

本人は無自覚だが、戦闘以外の適性ランクが全てSSSという超天才。盗作疑惑の持ち上がったヴィトゥキントの工房に雑用係として潜入することに。

リーゼロッテ・ホムーロス

ホムーロス王国の第三王女。死に至る呪いを治してくれたクルトを慕い、行動を共にするようになる。

プロローグ

諸島都市連盟コスキートのパオス島で開催かいさいされた武道大会に参加していた僕、クルトが、同じ工房の仲間のリーゼさん、ユーリシアさんと工房に戻ってから一週間が過ぎた。

帰ってきた僕たちを待ち受けていたのは、有角種で僕の幼馴染おきななじみのヒルデガルドちゃん。

彼女は仲間のソルフレアさんと、パオス島で僕たちを色々手伝ってくれたチッチさんと一緒にいたんだけど、なんと僕たちの娘のアクリが、人工精霊だと教えてくれた。

そしてアクリのことを詳しく調べるために、僕たちにとあるお願いをしてきた。

それは、時間を越えて過去のハスト村——僕の故郷に行ってほしいというものだ。

それからヒルデガルドちゃんは、何か急ぎの用事があつたらしく、割とすぐに工房を去ったんだけど、あれから何の連絡もない。

時間を越えるっていうのがどういふことなのか、僕にはわからなかった。

今あるシーン山脈のハスト村じゃなく、ハスト村が引越し前にあった場所ってことかな？

リーゼさんは太守としての仕事で、そしてユーリシアさんはその護衛ということで、しばらく留守にしているから相談もできない。

一方の僕はと言えば、工房の仕事をしているだけで……僕だけこんな日常でいいのだろうか？
なんて思ってしまう。

庭の洗濯物を取り込んでから、近くのベンチに座ってボーっとしていた僕は、そんなことを考えながら呟く。

「このままでいいのかな？」

「……いや、よくないと思うぞ？」

そう言ったのは、さつきやってきて隣に座ったばかりの工房の専属冒険者パーティ「サクラ」の一員、カンスさんだった。

「やっぱりよくありませんよね」

「ああ……俺は練習用の木刀を貸してくれて言ってお前にこいつを渡されたわけだが、なんだ、これは？ 軽く素振りしただけで地面が抉れたぞ？」

「え？ 普通の木刀ですよ？」

「素材は？」

「ニーチェさんから貰った枝を使っています」

僕がそう言うと、庭を通りかかった緑髪の少女……ニーチェさんが返事をした。

「はい、私の枝を使っております」

彼女は工房の果樹園に住む、緑色の髪に褐色肌、碧眼の少女だ。

しかし、その正体は、大精霊ドリアードの分身である。

実はパオス島を出る時、ドリアードから、器となっていた大樹の枝を貰っていた。

言われた通りに工房の果樹園で接ぎ木したところ、あつという間に成長して、そこから現れたのがニーチェさんだ。

彼女はパオス島のドリアードと繋がっているらしく、時折ユーリシアさんが、コスキートの重鎮であるローレッタ様からの伝言を受け取っている。

そんなニーチェさんを見ながら、カンスさんがため息をつく。

「原因はそれか……接ぎ木したドリアードの枝から作った木刀とか……そんなもん練習用の木刀どころか、一撃でアイアンゴーレムを粉砕できるぞ」

「アイアンゴーレムを粉砕するだけなら、この物干し竿だけでも十分ですよ」

僕は笑って言って、洗濯物を取り込んだあとの物干し竿を振り回して、「えいや」と突く真似をした。

アイアンゴーレムは金属系ゴーレムの中でも脆い部類だから、簡単に対処できる。

「アイアンゴーレムを物干し竿でか。本当にそれができるのなら凄いが……どうだ？ 模擬戦でもやってみるか？ もろろん、寸止めでがな」

カンスさんも別の物干し竿を手に取り、僕に提案した。

模擬戦！

そうだ、武道大会で成長した僕の姿をカンスさんに見せてみよう。

「はい、お願いします！」

僕はそう言って頭を下げた。

——この物語は、武道大会に出場し、半人前ながらも戦士となった少年の物語だ。

「では、立会人は私がさせていただきます」

僕とカンスさんが物干し竿を構え、ニーチェさんがそう言った直後、僕は動いた。

試合では二種類の戦い方がある。

じっくりと相手の出方を見るのが一つ。

そしてもう一つは先手必勝、試合開始と同時に動く方法だ。

僕は武道大会では、先手必勝で動いてきたから、今回も同じように動く。

「えーいっ！」

物干し竿による、僕の突き。

しかしカンスさんは、それを呆れた様子で見ていた。

僕もやってしまったと思う。

だって、物干し竿は勢い余って僕の手から離れ、カンスさんに当たるならまだしも、あらぬ方向に飛んで行ったのだから。

「あ、しまった！ 誰かに当たったら大変だ！ すみません、急いで取りにいきます！」

僕はカンスさんとニーチェさんに頭を下げ、物干し竿の飛んで行った方向に走った。



「ミニコがこっちに来るのも久しぶりだな。アクリも喜ぶよ」

「ユーリシアちゃんにそう言ってもらえると嬉しいわ。私もアクリちゃんに会いたかったし」

私——ユーリシアは王都からミニコを連れてヴァルハの工房に戻ってきた。

ミニコは第三席宮廷魔術師。今は諸事情でリクルトの学校で教師をしているんだが、私とリーゼがコスキートでの出来事を報告しに行くタイミングで王都へ戻っていて、今回私が工房に戻るのに付いてきた形だ。

今回何かと役に立った諜報部隊ファントムのトップでもある彼女は、本当は私たちが帰ってきたその日にも話を聞きたかったそうさ。ただ、私とリーゼがずっと王宮に拘束されていたせいで、そうもいかなかった。

そんなわけで、合流してからここまでの道中、コスキートで起こった出来事を根掘り葉掘り聞かれたのだった。

私は工房が見えてきたことに安堵しながらため息をつく。

「それにしても、リーゼの奴が三日もクルトに会いに戻らないなんて、頑張るよな。てつきり毎日

城を抜け出しては工房に来ると思っていたんだが」

「ユーリシアちゃん、リーゼロッテ様に対して馴れ馴れしすぎるんじゃない？ 一国の王女なのよ」

「ミミコにしてはまともなことを言うな。リーゼがクルト離れていることといい、こりや槍やりでも降るんじゃないか？」

私が軽い口調で言うと、ミミコは空を見上げた。

「物干し竿なら降ってくるみたいよ？」

「え？」

ミミコの言葉に反応して空を見上げた直後、私の少し手前に一本の棒——物干し竿が落ちてきて、私の前に突き刺さった。

なんで物干し竿？

どうも工房の方から飛んできたみたいだけど。

私が物干し竿を持って首を傾かげていると、家事中だったのかエプロンをつけたクルトが走ってきた。

「すみませーん！ 怪我はなかったですか？」

「クルト、これ、お前が投げたのか？」

「はい。果樹園でカンスさんと物干し竿で模擬戦をしてたら、手からすっぽ抜けて。あ、ミミコさ

ん、いらっしやいませ。すみません、こんな格好で」

「ううん、似合ってるよ、クルトちゃん」

たしかに似合っていた。クルトの奴、エプロン姿にますます磨はきがかかってるな。

その時、ポツリと雨が降ってきた。

「あ！ 洗濯物、カゴに入れたままだ！ すみません、失礼します」

クルトはそう言うと、物干し竿を持って戻っていく。

「慌たらしい奴だな。もっと落ち着けば、戦闘でも力を発揮はっできるはずなんだが」

「ねえ、ユーリシアちゃん。果樹園からここまでってどのくらい距離がるの？」

「ん？ 三百メートルくらいじゃ……あ」

世の中には、竿ではないが、槍を投げる戦術は存在する。

ホームロス王国で一番の槍の名手といえは、王国遠征部隊第一將軍のサンノバ・リストカッツだろう。馬術と槍術にかけては右に出る者がおらず、また馬上から槍を投げて、五十メートル先の敵国の指揮官の心臓に突き刺したという逸話は、王国の兵の中でも知らない者は少ない。

だが、そんな彼でも百メートルも槍を投げることはできないだろう。

「相変わらずクルトの奴、能力がちぐはぐ過ぎるな」

しかし、クルトの戦闘能力が皆無かいむと呼ばれるのも今日までだ。

なにしろ、こっちはミミコが作った秘密兵器があるのだから。

雨が本降りになりそうなので、私とミミコも急いで工房に戻ることにした。

私とミミコが工房に到着してしばらくして、クルトが私の部屋にやってきた。洗い終えていたものの、私の部屋には勝手に入れないからとため込んでいた洗濯物を持って来てくれたのだ。

どうやらお昼寝の時間が終わったらしいアクリも一緒だ。

「おいで、アクリ」

私がそう言うと、アクリが転移して私に抱き着いてきた。

「よかったね、アクリ」

クルトはそう言って、洗濯物を私のタンスの中にしまっていく。

もちろん、下着は自分で洗っているのですがこの中に含まれていない。下着だけは自分で洗っている。それが私の望みであり、クルトの望みでもあった。

しまい終えたのを確認して、部屋のソファでくつろいでいたミミコが、例の物を取り出した。

「これはクルトちゃんのために作った新しい武器なの」

そう言ってミミコがクルトに渡したのは、先端が筒のようになっていて魔道具だった。

「新しい武器ですか？ 僕のために？」

「そう。クルトちゃん、剣も槍も斧も弓矢も棒も拳も杖も、全部適性Gランクでしょ？ だから、全く新しい武器なら使えるんじゃないかって思ってた」

「ミミコさん、僕のためにそんなに考えてくれていたんですね」

クルトが感動で震えている。

「パパ、ないてるの？ ミミコおねえちゃん、パパをいじめたの？」

「違うよ、アクリ。僕は嬉しいんだよ……ありがとうございます、ミミコさん。それで、これってどうやって使うんですか？ 見たところ、魔力を筒の中から打ち出す道具みたいですけど」

「クルトちゃん、見ただけでそれがわかるんだ。うん、これは魔力を込めて放つ、魔力銃ってもの。クルトちゃん、魔法を使えないだけで、魔力は人並み以上にあるでしょ？」

「え？ そうなんですか？」

クルトは目を丸くしているが、相変わらず無自覚だな。

こいつ一人の魔力で、ドリアードの元となる大樹を育て上げたというのに、まだ自分の凄さを理解していないのか。

まあ、理解してしまったら昏睡状態になって記憶を失うのだけど。

「そうなの。この魔力銃は使用者の魔力を使って、疑似的に魔法を使えるものなんだ。生憎の天気だけど、外で試し撃ちしてもらってもいい？」

「はい、構いませんよ」

私たちは工房の裏庭に移動した。雨が降っているのですが、アクリには猫をモチーフにしたレインコートを着させている。

裏庭で待っていたのは、「サクラ」の一員であるダンゾウと、布で覆われた荷物だった。

「ダンゾウちゃん、お仕事お疲れ様。例のもの、問題はない？」

「もちろんござる」

ダンゾウはそう言っと、布を取っ払った。

そこにいたのは、簀巻^{すま}きにされた――

「ゴ布林!？」

そう、ゴ布林だった。

ミミコの奴、ダンゾウにゴブリンの捕獲^{ほか}を依頼していたようだ。

『グギャグギャ!』

口をふさがれていないゴ布林は必死に暴れているが、しかし解放されることはない。

「じゃあクルトちゃん、早速ゴ布林退治をしてみようか。この引き金を引くだけでいいから」

「ま、待ってください、ミミコさん。いくらなんでも、いきなりゴ布林を相手にするだなんて」

相変わらず、クルトのゴ布林に対する苦手意識は半端ないな。

まあ、子供の頃からゴ布林にはいろいろと苦汗^{くせう}を飲まされているそうだから仕方がない。

それに、ゴ布林が苦手なのはクルトだけじゃない。

なんとか捕獲に成功しようだが、ダンゾウのゴ布林を見る目は普通の冒険者とは違うものがある。前に「サクラ」とクルトを助けに向かったことがあるんだけど、その時はかなりの数のゴブ

リンに囲まれて絶体絶命だったから、ちょっとした苦手意識があるんだろう。

そんなクルトやダンゾウの様子を気にすることもなく、ミミコは口を開く。

「安心して、あのロープは千切れないから。クルトちゃんは緊張して変なところに攻撃する癖^{くせ}があるみたいだけど、まず、このスコープ――ガラスの筒を覗^{のぞ}いて、ゴ布林を捉えたらこのボタンを押すの。そしたら、自動追跡装置が作動して、ターゲットと弾道の角度の誤差が上下左右十三度未満なら、自動追尾するようにできてるから」

「うっ……わかりました」

簀巻^{すま}きにされているので襲われることはない。

それを理解したクルトは、緊張しながらもミミコに言われた通りにゴ布林に魔力銃を向けた。

「うん、じゃああとは引き金を引いて」

「わかりました」

『最弱の冒険者クルトV.S.簀巻^{すま}きにされたゴ布林』という、武道大会でも存在しなかった勝負の火蓋^{ふた}が今、切られようとしていた。

クルトが息を呑み、そして引き金を引くと、光の玉が魔力銃から発射された。

……発射され……た？

「かわいいの!」

アクリが嬉しそうに言った。



銃口から飛び出したのは、シャボン玉みたいな光の玉。それがふわふわと、ゴブリンに向かっていく。

アクリは喜んでいたが、私とミミコは意味がわからなかった。

しかし、魔力はしっかりとゴブリンを捉えて飛んでいき、その顔に近付き――

『フッ』

ゴブリンの息によって吹き消された。

って蠟燭ろうそくの火かっ！

「そんな……理論上、クルトちゃんの魔力量なら一瞬でゴブリンを破壊できるはずなのに」

「やっぱり僕には無理ですよ。いくらミミコさんの道具が凄くても、ゴブリンを退治するなんて」
クルトはそう言うけれど、私は気になったことがあった。

「クルト、その魔力銃、ちょっと貸してくれる？」

「はい、どうぞ」

さて、ミミコの理論が正しければ、この魔力銃の中にはクルトの魔力が、それこそゴブリンを一瞬で破壊できるような魔力が充填じゅうけんされている。

しかし、先ほど放たれたのは、ゴブリンどころかスライムすら倒せなさそうな光の玉だった。

なら、この魔力銃には、使われなかった魔力が残っているのではないだろうか？

私は試しに、空に向かって魔力銃の引き金を引いた。

そして――頭上の雨雲に巨大な穴が空き、太陽の光が差し込んできた。

「晴れたの！」

アクリが喜んで駆け寄ってきたが、私は喜べそうにない。

私はクルトにアクリを預け、ミミコと密談を開始する。

「ミミコ、わかっていと思うが――」

「もちろん、このことは報告できないわ。魔力銃の想定最大出力の千倍くらいの威力だもの。こんな世間に知られたら、クルトちゃん、魔力銃の充填係として兵器生産工場の歯車になっちゃうわ。クルトちゃん以外の誰が引き金を引いても同じ威力になるのならなおさら」

「クルト以外……か」

私はそう言う、魔力銃を持ってクルトに近付いた。

「クルト。さっきの要領で、今度は私のように空に向かって魔力銃を使ってみて」

「わかりました」

クルトはそう言う、アクリを私に預けると、空に向かって魔法を放った。

すると、先ほどよりもさらに高出力となった光の線が飛んでいった。

「あ、できました！ ユーリシアさんのアドバイスのお陰です。これでゴブリンも倒せますね。空に向かって放ってから、軌道修正をしてゴブリンに当てればいいんですから」

「まって、クルトちゃん。自動追跡ができる角度は十三度未満。空に向かって放っても自動追跡で

きないよ」

「そうですね。ちょっと改造させてもらいます」

クルトはそう言う、^{かばん}鞆の中の工具箱を取り出してなにか細工をした。

「これでどこに放つても自動追跡できるようになりました」

「え？ うそ、この一瞬で？」

「はい、ではいきますー！」

クルトはゴブリンに標的を合わせたあと、空に向かって魔力銃を放った。

クルトの言う通り、その攻撃は空中で急激に角度を変え、ゴブリンに向かって飛んでいく。

『ふっ』

そしてその攻撃――光の玉はゴブリンの息によって吹き消された。

クルト決死の試合は、近年まれにみるドタバタ劇で幕を閉じるのだった。

×この物語は、武道大会に出場し、半人前ながらも戦士となった少年の物語だ。

○この物語は、武道大会に出場しても何も変わっていない奇想天外な少年の物語だ。

第1話 遺跡の調査

私、リーゼロッテ・ホームロスはもう辟易へきえきしていました。

王宮に呼ばれて以来、コスキートで起こった出来事を一から十まで（クルト様の力のことを極力隠し）報告したのは、これで何回目でしたでしょうか。

時と場合によつては戦争の兵器となりうる大精霊ドリアード、その召喚に成功した今回の事件を放っておけないのは十分に理解しています。ですが、しかし、クルト様やアクリとの大切な時間をこうして何日も奪われるのは困りものです。

クルト様から預かったこのハンカチがなければ、私はもう意識を失っていたかもしれません。

私が王宮に出向く日、クルト様がこのハンカチを私に下さった時のことは今でも忘れられません。

『あ、リーゼさん。ハンカチを忘れたんですか？ よかったら僕のを使ってください』

そう言つて渡してくださったこのハンカチには、クルト様の優しさが詰まっています。

ハンカチを大事に抱え、側仕えと共に王宮の廊下ろうか歩いていると、反対方向から見知った顔の女性たちが歩いてきました。

すれ違う前に、私は頭を下げます。

「御無沙汰ごぶさたしております、イザドーラ義母様かあ。イザベラは元気にされていますか？」

「お久しぶりね、リーゼロッテ。ええ。イザベラは元気にしているそうよ」

「それはなによります。私の大切な妹ですから」

「用事はそれだけかしら？ それでは失礼しますね」

私の前で立ち止まっていたイザドーラ義母様は、こちらの返事を待たずに歩み去りました。

私に背を向けた後、イザドーラ義母様が浮かべた怨嗟えんさに満ちた表情は、昔の私なら恐怖したでしょうね。

なぜ、歩み去っていくイザドーラ義母様の顔を、私は見ることができたのか？

それは、イザドーラ義母様と話していた私は、クルト様からいただいた魔法剣、胡蝶こちょうによつて作り出された幻影で、本物の私は少し離れたところを歩いていたからです。

どうも最近、イザドーラ義母様の様子がおかしいという話をミニコ様から聞いていた私は、彼女と直接顔を合わせないよう、蜂合はちあわせる可能性がある場所では、幻影に少し前を歩かせるようにしていました。

イザドーラ義母様だけでなく、側仕えや護衛の兵すらも欺くあそむことができるこの胡蝶の力は、さすがクルト様としか言いようがありませんね。

私は胡蝶の幻影と重なるように移動してから、そして幻影を解除します。

「どうせ恨みを買うのなら、第三王女の座をイザベラに明け渡してもよろしいのですけどね」

私が思ったことを口に出すと、側仕えが周囲を見回し、小声で私を窘めてきました。

「リーゼロッテ殿下。誰かの耳に入ったら一大事です。あなたは王国と帝国の血を継ぐお方、両国における平和の象徴なのですから。それに、イザドーラ様に実権を持たせられないのは殿下もご存知でしょう」

「そうでしたわね」

イザドーラ・アークママ。

この名前は本来妙なものです。

なぜなら、彼女は王家に嫁いできた女性であって、イザドーラ・ホムーロスと名乗るべきだからです。

しかし、それを許さなかったのは元老院です。王家の古いしきたり、伝統、その他様々な理屈をこね、彼女を王族にすることを許しませんでした。

一番の理由は、彼女が流浪の民の出身だからでしょう。

流浪の民——自らの国を持たず、家も持たず、地位も身分も持たない。ただ、風のように旅をし、町から町、国から国へと移動する民のことです。本来、流浪の民は国家というシステムとは相容れない存在。流浪の民という民族は存在せず、他国の諜報員であると言う有識者すらいます。

そんな民族の人間が王族の正式な一員になることに、元老院は納得できなかったのでしょうか。しかし、彼女が嫁いでくることを認めないわけにはいきませんでした。

なぜなら、彼女の弟——ヴィトウキント・アークママは、王国、帝国を含めた七つの大国に認められ、それぞれに工房を持つ工房主なのですから。

彼の発明した魔道具は数多く、その中には、転移石、転移結晶、転移盤の三つがあります。

転移石に触れるとその転移石の情報が触れた者の体に記憶され、転移結晶を使うことで触れたところがある転移石から転移石に瞬時に移動することができるようになります。そして転移盤は、その転移石の機能を無くすことができる魔道具です。

転移石の存在はとても重要で、それがあるかただけで戦争の勝敗を左右しかねません。

そんな魔道具の製法を知るのは、ヴィトウキントのみ。

結果、七カ国はヴィトウキントから自身を工房主として認め、さらに彼の六人の姉と母に、国内の重要な地位を与えるよう求められました。アークママ家の次女であった義母様も含めて。

このホムーロス王国においても、国王陛下も元老院も、誰もが頭を悩ませたことでしょう。

ヴィトウキントの思惑は分かりませんが、受け入れないわけにはいかず、かといって国の運営に携わる地位を与えることはできない。

結果、義母様は王族ではない第三王妃という矛盾する立場に収まりました。

その立場を利用して好き放題しているようですが、人間の欲望は尽きないもので、自分の子供を王族にしようと必死のようです。

そんなこともあり、かつては私に呪術を掛けたのではないかと勘繰ったものです。

私に呪術を掛けさせたのは、トリスタン・メーノルフ司教でした。ただ、その司教に、ポラン教徒でもないイザドーラ義母様が寄進をしていたということもわかっています。

しかしそんな闇の深そうないザドーラ義母様のことを、私が内心でも「義母様」などと尊敬しているように言うには理由があります。

だって、私にとって彼女はある意味希望なのですから。

たとえ流浪の民であっても、理由さえあれば王族と結婚できる。

つまり、王族である私も、クルト様と結婚できるということに他なりません。

「今すぐ帰ります！ 待っていてください！」

「帰らないでください、リーゼロッテ様！ まだ公務が残っています！ あとここがリーゼロッテ様の家です！」

側仕えが私を止めようとしたが、そんなことで私の愛は止まりません！



クルトの魔力銃での訓練は、私、ユーリシアの目の前で失敗に終わった。

目隠しをしても反対方向に向けて打つても何をして、ゴブリンに向かつていく攻撃は攻撃力皆無の光の玉になるのだ。

もしかしたら魔力銃に欠陥があるのではないかと、ミミコが試しにゴブリンに向かつて魔力銃で魔力を放つてみたところ、ゴブリンは見るも無残な姿に変わってしまった。

そんなわけで今、私とミミコは工房のお風呂に入っていた。

「まあ、魔力銃の改良方法がわかっただけでも良しとしようかな」

ミミコが頭の上にタオルを載せながら湯に浸かった。

「ふう……学校にあるシャワーも便利だけど、やっぱりお風呂が一番ね。私も学校からこっちに引っ越しちゃおうかな」

「学校と工房の二者択一にしているようだが、お前の本来の家は王都だろ？ ミミコカフェはどうするんだよ」

「ああ、あれならオフィリアちゃんのところのミシエルちゃんが働いてくれるから大丈夫だよ。さすがはオフィリアちゃんが仕込んだエルフ、薬や魔道具作成なら十分任せられるよ。台所は見るも無残な姿になってるけど」

「……憐れなエルフだな」

私はそう言いながら湯に浸かる。

すると、ミミコが私の一点をじっと見てきた。

その視線には心当たりがある。

リーゼと一緒に風呂に入ってきた時もいつも感じていたから。

「ユーリシアちゃん、また大きくなったよね」

ミミコがズバリ言ってくる。

たしかに少し大きくなっていると思う。男装した時、包帯ですつと押さえていたせいだろうか？その反動により、武道大会の間に二センチ程大きくなっていた。

しかし、これ以上大きくなると、戦いにも影響が出るだろうから本当は勘弁してほしい。クルトに頼んで、豊胸剤ならぬ制胸剤を作ってもらいたいくらいだ。

まあ、そんなことをミミコに言えるはずもない。

まだ十五歳で将来に可能性があるリーゼならまだしも、こいつの体がこれ以上成長するとは思えないからな。

「なにか失礼なこと考えてるでしょ」

「別に」

「嘘だよ」

ミミコはそう言うのと、湯の中に沈み、私の背後に回り込んで抱き着いてきた。

「ええい、こうしてやる！」

「やめろ、ミミコ！　ちょ、そこは——」

「うりうり、ほら、私をクルトちゃんだと思って」

「リーゼじゃないんだ。そんなの思えるかつ！」

だいたい、クルトならもつと優しくしてくれる！

って、それだと私がいつも変なことを考えているみたいじゃないか。

色ボケ女王リーゼじゃあるまいし。

「しつこい、今度はこっちの番……あ」

振り向いてミミコの胸を鷺掴みにしようとして、手が空を切った。

「……………」

「……………」

沈黙が場を支配する。

悪気はなかったんだが。

「あ……ああ、それで、魔力銃の力が働かない原因は、やっぱりクルトの呪いだろうか？」

私は白々しく話題を切り替える。

クルトの呪い。

これは私が勝手に呼んでいた名称だが、今では私、ミミコ、オフィリアさんの間に浸透している。クルトは力もあり魔力もあり、さらにはゴーレムやトレント相手には戦闘能力だつてある。

そんなあいつが、それ以外の魔物や人間と戦う時は、人並み以下どころか赤子並みの力しか発揮できないのは正直言っており得ない。

私たちは、なにかの呪いではないかと思っている。

たぶん、魔物に対して攻撃をした時、ではなくクルトが攻撃だと認識した時に失敗するのだろう。タイコーン辺境伯の領主町で弓矢の射的ゲームをした時も、矢が飛ばなかったって言っていたし。「……はあ。まあ、そうとしか思えないかな。でも、まさか本人の体だけじゃなく魔力銃にまで影響が出るなんてね」

「子供の頃、ゴ布林シャーマンに何度か呪いを受けたことがあるって言っていたけど、それじゃないよな？」

「まさか。ゴ布林シャーマンの呪いなんて、せいぜいお腹を壊す程度でしょ？ クルトちゃんもおかゆを作ってもらって治したって言ってたし」

そのおかゆで、リーゼにかかった呪いを治したこともあるからな。

たしかにゴ布林シャーマン程度の呪いなら、クルトの普段の食事で解呪できているはずだ。

逆に言えば、本当に呪いがかかっているとすれば、クルトでも治せない呪いということになる。

そんなの、私の手に負える問題じゃない。

治療できる可能性があるとするば、ハスト村の住民たちくらいか。

「そういえば、ミミコ。お前、魔力銃の試射だけのためにここに来たわけじゃないよな？」

「うん。今日はクルトちゃんに仕事をお願いしようと思ってきたのよ。正確には、アトリマスタ工房主としてのお仕事ね」

「アトリマスタ工房主としての仕事？」

「遺跡の調査よ。ラピタル文明の遺跡——前にユーリシアちゃんも上級悪魔と戦ったことがあるでしょ？」

ああ、あそこね。

この町から西に行った、森の中にある遺跡のことだ。

魔領から近く、最近まで発見されなかったんだよな。

「でも、なんでクルトなんだ？」

「あれ？ 知らなかった？ クルトちゃんは解読適性もSSSランクなの。古代文字とかパパッと読めるでしょ？」

「マジか……いや、まあクルトだしな」

しかし、遺跡の調査か。

さすがにそんな場所だと、私も護衛としてついていけないといけないよな。

となると、問題はアクリか。

武道大会から帰ってきた日、ずっと一緒だからって約束しちゃったし、連れて行ったほうがいいかな？

「アクリも連れて行っていいか？」

「いいんじゃない？ 今回は私も一緒に行くつもりだから、危険はないでしょ。むしろ万が一にも遺跡が崩れて生き埋めになりそうになったら、あの子の転移は便利でしょ？ それに、アクリちゃ

んのこともちよつと気になるし」

「そんなに危険ならアクリは連れて行きたくないんだが。つて、ミミコも来るのか？」

アクリが時と空間を操る人工大精霊であるらしいということはミミコにも伝えている。ミミコなりにその目で確かめたいことがあるのだろう。

しかし、そうなると親子三人水入らずのピクニック——というわけにはいかなさうだ。

そういうことで、翌日、私たちはヴァルハの西にある遺跡に向かうことになった。

目的地までは馬車での移動だ。

「みんなでピクニックなの」

アクリが嬉しそうに言った。

一応仕事なんだけど、まあ危険はないって話だし、あの遺跡なら日帰りでも十分行つて帰ることができる。日帰り旅行気分でも悪くないだろう。

クルトも朝からお弁当を楽しそうに作っていたからなおさらだ。

「……しかし、なんで私が御者ぎよしゃなんだよ」

馬車の中はクルト、アクリ、ミミコ、そしてリーゼがいた。

リーゼの奴、出発時刻ギリギリに帰つてきやがったのだ。

おそらく、ファントムに私たちの動きを見張らせていたんだろうな。

「仕方ありませんわ。中は四人しか座れませんもの。それに、護衛なら外というのが普通ですわ」

「アクリは膝ひざの上に乘せたらいいだろ。あと、一応私、女准男爵おんなじゆんたくなんだけだな」

貴族が自分で馬車を操るなんて普通ありえないぞ。

まあ、普通じゃないのは重々承知している。それに、この中で馬車の操縦たに長けているのは私だし。

それでも、どうせなら、私たちのあとをこっそり尾行しているファントムの誰かに御者をさせればいいと思うんだが。

あいつらこそ本当の意味で護衛だろ？

私がつめ息をついていると、ミミコに渡された調査概要がいようの書類を手に、クルトが口を開く。

「すみません、ユーリシアさん。本当は僕が馬車を操るべきなんでしょうけど」

「いいですよ、クルト様。こうして書類を確認するのも大切なお仕事です」

「あの、リーゼさん。そんなにくつつかれたら書類が捲めくれません」

イライラしてくる。

本当はさつさと遺跡に行きたいんだけど、これ以上スピードを上げると、こっそり付いてきているファントムに迷惑をかけるからな。

「ユーリママ？」

「うわ、アクリ。無暗に転移したらダメだって言っただろ？」

アクリがいつの間にか私の膝の上に座っていた。

「ユーリママ、ひとりでさみしそうだからきたの」

「そうか。アクリはやさしいな」

さっきまでのイライラが一瞬でなくなった。

まるで転移魔法で飛んでいったみたいだ。

「アクリはすごいな」

「うん、アクリ、すごいの！」

「よし、じゃあ一緒に行こうな！」

私はそう言って、馬車の手綱たづなを強く握った。



「わあ、ここがラピタル遺跡なんですね」

クルトが遺跡の入り口を見てそう言った。

「あれ？ クルト、お前も来ただろ？」

「はい。でも、正面から入るのは初めてなので」

ああ、そうだった。

クルトが以前来た時は、工房から直接穴を掘ってやってきたんだった。

工房からここまで十キロはあるというのに。

いったいどうやってたらそんなことが可能なのか、一緒にいたリーゼに聞いたことがあるが、

『凄こわかったです……とにかく凄こわかったです』

と、語彙力が怪しくなるくらいに凄こわかったということしかわからなかった。

要するに、何が起こっているかわからないぐらいの速度で穴ができていくのだそうだ。掘った土

はどこに消えたのか、リーゼにもわからなかったらしい。

しかも、戻る時に同じ速度で穴を塞ふさいでいったのだから恐ろしい。

「中也広いの！」

アクリが遺跡の中を走り回る。

「綺麗きれいな遺跡ですね。つい最近スケルトンが暴れたとは思えません。古代文明の叡智えいちを感じます」

リーゼも前はゆつくりと遺跡を見ている暇はなかったようで、感慨深げに周囲を見回した。

「天井付近の明かり取りの配置のお陰で、外と変わらなくらいに明るいみたいです」

クルトが当然のように中が明るい理由を告げた。

ああ、言われてみればたしかに明るい。古代ラピタル人の建築技術は現代のそれにも匹敵するの
かね。調査の報告書に書かせておかないと。クルトのことだから、この建築術もよくある話で済ま
せてしまうかもしれない。

その後、私たちは遺跡の中を調べた。

もともと、遺跡はすでに調べ尽くされたあとなので、新しい発見などそうそうあるわけが――

「ここに隠し部屋がありますね」

クルトがそう言って、地下に続く隠し階段を見つけた。

地下といっても、階段の下は倉庫のようで、あるのは一部屋だけだ。

「あら、宝物庫のようですね。さすがクルト様です。これでクルト様も大金持ちですね！」

「え？ でも中にはあるのはミスリルで作った金属細工ばかりでしたから、古代のアトリエだったんだと思います。歴史的な価値はあっても、金銭的な価値があるとは思えません」

……古代のミスリル細工……埋蔵金まいざうきんってレベルじゃないんだが。

一個一個が金貨数百枚から数千枚で取引される一級品だ。

「それに、ミスリルさんからもらった書類に、遺跡で見つけた品は国庫に納めるという決まりがありましたから。価値があっても僕たちのものじゃありませんよ」

「クルトちゃんの言う通りよ。古代ラピタル文明の調度品は過去に古代人が滅んだ原因を知るのにとても重要なものなんだから」

そうだよな。

クルトの周りにいるのが、私たちでよかった。

私たちが欲深い人間だったら、ミスリル細工に頼らなくても、クルトにちょっとお願いするだけ

で大金を得る手段なんて山のようにある。それをしないのは、ひとえにクルトのことを大切に思っているからだ。

「……でも、ちょっとだけならもらってもわからないんじゃない？ 一人一個とか」

「おい！」

私はミスリコの頭にチョップを入れた。

アクリが見ている前で泥棒どろぼうのお誘いなんかするんじゃない。

今の聞いていなかったよな？

アクリの方を見ると、彼女はじつと壁を見ていた。

よかった、ミスリコの戯言ざれごとは耳に入っていないようだ。

ってあれ？ アクリの奴、そういえば何を見ているんだ？

小さな子供が何もなかったところをじつと見ていると、そこには幽霊ゆうれいがいるって聞いたことがある。

まさか――

「ん？ どうしたの、アクリ」

クルトが尋ねた。

「ここ――」

アクリが何もない壁を指さした。

やっぱり――幽霊がいるのかっ!?

「別の部屋があるの」

「ああ、うん。こっちにも部屋があるみたいだね。でも、こっちは調査済みっぽいから別にいいかな？」

「そうか、別の部屋があることに気付いたのか。」

アクリは転移魔法が使えるから空間の把握能力が普通の人よりも優れているのかもしれない。考えてみれば、転移した先が壁とか土の中だったら大惨事に繋がる。少なくとも転移できる空間があるということくらいは把握できるのだろう。

「え？ 過去の調査団からは、この隣にも隠し部屋があるなんて報告は受けていないよ？」

「ミミコがそんなことを言い出した。」

でも、クルトはすでに調査されているって言ったよな？

なんだ、この矛盾は。

私たちは、クルトとアクリが「ある」と断言した別の部屋に向かった。

クルトの案内で一度階段を上がり、隠されていない下り階段を降りる。

そこは、かつてマールフェイスが魔法陣の中に閉じ込められていた部屋だった。

「ここですね」

クルトは、まるで近くの雑貨屋さんを案内するかのように隠し扉を開けた。

今日私たちは、この部屋にはまだ入っていない。

おそらくクルトは、以前ここを訪れた時にすでに見つけていたのだろう。

「クルト、なんでこの調査が終わっているって思ったんだ？」

「埃の切れ目ですかね？ たぶん、ここは日常的に誰かが使っているんだと思います。前に来た時に見て覚えていました」

クルトは扉近くの床を指でなぞって言った。

「いったいどんな観察眼なんだ。」

「クルトちゃん、日常的に使われているって言った？」

「はい。今回も、少なくとも一週間以内に誰かが通っている形跡があります」

「ミミコの問いにクルトは頷いた。」

「ユーリさん。たしかここに調査に来たのって」

「ああ、例の事件があつてからすぐに調査が行われたが、それ以降は公式には調査は行われていないはずだよ」

「遺跡荒らしでしょうか？」

「その可能性は否定できないが……遺跡荒らしは日常的に使わないと思うぞ」

私とリーゼは囁きあった。

しかし、警備をしている衛兵がいらないとはいえ、めぼしい宝がない（と思われていた）遺跡を荒らすトレジャーハンターなんているだろうか？

盗賊がアジトにしている可能性も考えたが、魔領近くのこんな場所にアジトを作る理由が見つからない。行商人は絶対に通らないだろう。

この先の部屋に行けば謎は解けるのだろうか？

ミミコが部屋の中に探知の魔法をかけ、問題ないと判断した。

密閉されていた部屋というのは毒ガスが満ちていることもあるが、人が出入りしていたということもあつて、その心配はなかったようだ。

部屋に入つて最初に気付いたのは、この部屋は少なくとも一週間は密閉されていたはずなのに、妙に空気が新しいということだ。

部屋に換気機能があるのか、それともここを利用している者の仕業かはわからない。

そして部屋の壁には、古代文字と思われるものが書かれていた。

「クルト、これ解読できるか？」

「古代文字ですね。僕が子供の頃に遊びにいった遺跡にも似たような文字がありました。はい、読めます」

「……ラピタル文明の古代文字って、まだ解読が全然進んでいない未知の文字群なのに」

ミミコがうなだれるように言ったが、まあ、クルトだしな。

「パパ、なにがかかれてるの？」

真つ暗な部屋が怖いのか、クルトのズボンの裾をしっかりと掴みながらアクリが尋ねた。

「これはね、転移の魔道具の作り方が書かれているんだよ」

「転移の魔道具っ!? 転移石と転移結晶の作り方かっ!?」

「いえ、ここに書かれているのは限定的な三次元転移ではなく、おそらく高次元——悪魔界や神界への転移を為すための魔道具の作り方だと思えます」

「悪魔界に神界って、もう童話の世界じゃない!?」

ミミコが言った。

悪魔界や神界は、存在すると言われているが確認することもできない世界だ。

「ミミコ、そんなに驚くことなのか？ 実際に悪魔が召喚されたのを私たちは見たことがあるだろう？」

あれも言うなれば悪魔の転移装置だ。

私はそう思ってたのだが、違ったようだ。

「ユーリシアちゃんは知らないかもしれないけれど、召喚される悪魔っていうのは、元からこの世界にいる悪魔なの。遙か昔、魔神によって悪魔界から追放されたそうよ。ただ、悪魔はこの世界に実体を持つためには力が必要なの。その力を得るのが悪魔の契約——魔力や魂を生贄に捧げて実体化させる。この話は昔の学者が召喚された悪魔と契約し、直接聞いた話だそうだから、まず間違いないわ」

悪魔は契約には絶対に従う。

契約で情報を聞き出したというのならその情報は正しいだろう。

つまり、私たちが悪魔を召喚したと言っているのは、実際のところ悪魔を見えるようにしているということなのか。

「クルト、そんな転移装置、作れるのか!？」

私は質問して、「しまった」と思った。

クルトのことだ、そんな質問をしたら、「はい、作れますよ」と言うに決まっている。

悪魔界なんかに転移できる装置ができたらしらどうなることやら。

変な事件に巻き込まれるのはもう御免だ。

だが、クルトは意外なことを言った。

「僕にはちよつと複雑すぎて。理論の理解はできるんですけど、最後まで書かれていませんし、実現するのは無理ですね」

「クルト様でも作れないものがあるのですね」

「あはは、当たり前ですよ。作れないものだらけですよ」

驚くリーゼにクルトは苦笑したが、私は少し安心した。

部屋はさらに奥に続いているので、引き続き奥に向かう。

そして、私は思わぬものを見つけた。

そこにあつたのは、巨大な転移石だったのだ。

なんでこんなところに転移石が？ 誰かが設置したのだろうか？

「ユーリシアちゃん」

「わかったよ」

ミミコが言わんとしていることを察し、私は転移石に触れた。

そして、転移結晶を使い、移動しようと試みる。

しかし――

「ダメだな。私の登録している場所のどこにも転移できない」

「そっか……転移盤で制御をしているのか、それとも――」

私の脳裏を、ある仮説がよぎった。

「高位の次元に転移するための転移石……という可能性はありませんか？」

リーゼが言った。

やはりそうなってくる。この部屋の壁に書かれていた内容から察するに、普通の転移石じゃないんだらう。心なしか、私たちが知っている転移石より大きく見えるし。

「うーん、これだと高次元への転移はできそうにありませんね」

クルトが転移石を調べて、リーゼの考えを否定する。

「クルトちゃん、見ただけでわかるの?」

「はい。この転移石はさつき壁に書いてあつた理論に基づいて作られていますから。これだと高次

元に転移はできません。人工的に創り出した疑似高次元くらいなら転移できるかもしれませんが」「そんなもの作れるのか？」

疑似的な高次元——世界をひとつ作るようなものじゃないのか？

「僕には無理ですね」

さすがにこればかりは私も安心した。

そこまでいけば、クルトⅡ神になりかねない。

「そういう研究を遊びでしている人は村にいました」

一気に不安になった。

本当に作ってないだろうか？

工房や町を作るのと全然違うんだぞ？

「では、クルト様ならこの転移石の先に行くことはできますか？」

「それも無理ですね。部品がいくつか足りなくなっているみたいで、双方向の転移ができなくなっているようです。この転移石は向こう側から来るだけの一方通行みたいです」

クルトの言う通り、転移石の周りにはなにかを嵌め込むような窪みがいくつもあった。

でも、足りない部品はいつたどこに？

元からなかったのか、それとも——たとえばここに出入りしているという誰かが盗んだのか？

その後、クルト、リーゼ、ミミコの三人で、部屋の調査が徹底的に行われた。

リーゼの奴も、工房主オフィリアさんの弟子ということもあり、調査の役に立っている。

自分がバカだとは思わないが、しかし専門的な知識のない私は、邪魔にならないところでアクリとおままごとをして遊ぶことにした。

おままごとなんて久しぶりだし、少々気恥ずかしい。

ローレッタ姉さんとよく遊んだっけ。というか私が無理にせがんでいた。

ドリアードの大樹の中で過去の記憶を見たせいか、ローレッタ姉さんとの思い出がずいぶんと鮮明に蘇るようになった。

きつと、私とおままごとをしていたローレッタ姉さんも少し恥ずかしかっただろう。

そんなことを思いながら二人で遊んでいるうちに、調査は終わった。

結局、目新しい発見はなかったようで、クルトが申し訳なさそうにしていたが、隠し部屋二つを発見し、そして壁面の文字の解読をしているので十分過ぎる成果だと思う。

私たちは例の隠し部屋の前で昼食をとることにした。

「これ、アクリがつくったの！」

アクリがサラダが挟まっているパンを指さして言った。

作ったといっても、クルトが用意したパンにアクリが燻製肉と野菜を挟んだだけだ。難しかったのか、トマトがいくつか潰れている。

それでも私は嬉しかった。

娘の手料理を食べることができるといのは、感慨深いものがある。

「上手にできているね。じゃあ食べようか」

私たちはまず、アクリの期待に答えてサラダが挟まったパンを食べた。

うん、これはうまい。

パンや燻製肉がクルトの手作りで、野菜もクルトが育てているため美味しいに決まっているが、それ以上に娘の愛情がたっぷりこもっていて、なおさら美味しい。

「美味しいよ、アクリ」

「えへへ」

ああ、本当にうちの娘は世界一だ。

こうして私を連れ戻してくれたクルトとリーゼには感謝するばかりだよ。

「……あれ？」

そうして五人でご飯を食べていると、アクリが転移石が置いてあった隠し部屋の方を見た。

何かに気付いたのだろうか？　じつとそちらを見ている。

不思議に思ったが、また隠し部屋でも見つけたのだろうと思なおし、先にパンの残りを食べようと思った——その時だった。

「——っ!?　みんな、私の後ろに下がれ！」

私はそう言ってパンを置くと、クルトから貰った愛刀の雪華を抜いた。

「ユーリさん、どうしたのですかっ!？」

「誰かの気配がする！」

「気配!?　でも、あの転移石は使えないと——」

リーゼが言ったが、そうじゃない。

「クルト、転移石はこちらから転移することはできないけど、別の場所から転移してくることは可能なんだよな？」

「はい。対応する転移石があれば可能です」

間違いないあったんだろう。

そして、誰かがここにやってきた。

おそらく、この遺跡に日常的に入っていた何者かが。

「ミミコ、リーゼ、援護を頼む」

私はそう言った。

出てくるのが人間だとは限らない。

疑似高次元とやらから来た存在かもしれない。魔族の可能性も、化け物の可能性だってある。

徐々に足音は近付いてきた。

そして——

現れたのは女性だった。